

平成21年5月31日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18401033
 研究課題名（和文）西インド石窟寺院の総合的研究-仏教石窟変遷過程の構造的理解に向けて-
 研究課題名（英文）Comprehensive research on Cave Temples in Western India-understanding the process of structural transition in Buddhist Cave Temples-.

研究代表者
 米田 文孝 (YONEDA FUMITAKA)
 関西大学・文学部・教授
 研究者番号：00298837

研究成果の概要：

従来、インド国内の石窟寺院の造営時期は前期石窟と後期石窟とに明確に区分され、その間に造営中断期を設定して論説されてきました。しかし、本研究で造営中断期に塔院（礼拝堂）と僧院を同一窟内に造営する事例を確認し、5世紀以降の後期石窟で主流となる先駆的形態の出現確認と、その結果として造営中断期の設定自体の再検討という、重要な成果を獲得しました。あわせて、看過されていた中小石窟の現状報告が保存・修復の必要性を提起し、保存修復や復元事業の契機になることも期待できます。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	2,200,000	0	2,200,000
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	4,700,000	750,000	5,450,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：人文学A・考古学

キーワード：考古学，美術史，地理学，仏教学，東西交渉史

1. 研究開始当初の背景

インドの石窟寺院に関する研究は、日本や欧米諸国さらにはインド本国においても個々の研究者による論考が中心で、その研究対象もアジャンター石窟やエローラー石窟といった世界遺産に登録されるような有名なものに限定されています。その一方で、1200窟以上にのぼるその他の石窟については、19世紀に

イギリス人によって植民地政策上から地誌調査の一環で作成された基礎資料(Fergusson, J. and Burgess, J., *The Cave Temples of India*, London, W. H. Allen, 1880)が現在に至るまでに提出された唯一の総合的調査研究の成果といっても過言ではありません。

こうした不均衡な研究の現状は、一握りの著名な遺跡の研究・保存が促進されるのに対

して、大部分の遺跡においては現状記録すらなされないまま、自然的・人為的破壊の進行を看過するという問題を発生させています。しかし近年、文化遺産研究における国際的な動向として造形物の存在意義を周辺環境とともに考察し、政治的・社会的要因をはじめ多角的に解明しようとする包括的な視点が高まりを見せています。

具体的には、サーンチーやアマラーヴァティといった主要仏塔址について、周辺に多数分布する小規模仏塔との関連を中心として、考古学・美術史・文献学・地理学などの多分野からの考察を行い、古代の文化的・社会的環境を包括的に理解しようとする研究が提出され始めています。このような研究動向を前提に、僻地の山間部に位置することから遺跡へのアクセスが極めて困難であるため、調査研究が立ち遅れている西インド地域の石窟寺院研究の現状を視野に、本研究課題を推進する必要性が希求されていました。

2. 研究の目的

インド共和国内の石窟寺院は、南アジア美術における宗教的造形物として最も古い形態のひとつを現代に伝えています。さらに、インドから中央アジア、中国を経由して日本に至る仏教の東漸経路において、文化および思想的規範の造形的媒介としてその伝播に大きく貢献したことが、各地に遺された石窟寺院から窺われます。

本研究は、仏教の興起地である南アジア地域から中央・西アジア地域、そして日本を含めた東アジア地域において、仏教を共通項とする汎アジア文化圏の形成が、古代社会の国際的展開を促進したことを念頭におき、石窟寺院という建築形態や文化様式が果たした大きな役割を考古学的視点と美術史的視点を重視して理解しようとするものです。本研究では、仏教石窟寺院の源流であるインド共和国を研究対象として選定し、その建築形態や文化様式がアジア地域の基層文化形成に果たした役割を正しく認識することを主目的として設定しました。

3. 研究の方法

本研究は、インド共和国における石窟寺院研究の調査研究で、従来は調査研究の対象とされることが少なかった中小規模の石窟(群)中を主な対象とし、研究目的に適い今後に発展しうる可能性があるとして判断した遺跡を選定して重点的に踏査しました。

具体的には前2世紀～後2世紀ごろに造営された前期石窟を様式的に継承する開鑿例に着目し、後3世紀以降に造営されたマハラシュトラ州南部を踏査しました。調査では、主要石窟の略測図の作成や画像記録の撮影な

ど、基礎資料の作成を推進しました。

この間、当該地域の考古学的指導者であるデカン大学考古学部のV.シンデ教授や、ジュンナル石窟をはじめとした石窟寺院全般について豊富な調査経験を有するV.シュレーシュ氏、J.シュリーカント氏など石窟寺院の専門研究者と意見交換し、調査方針と対象遺跡についての貴重な情報や史資料の提供を受けました。

4. 研究成果

平成18年度は平成19年2月28日～3月24日の期間、インド共和国内において現地調査を実施しました。初年度の調査として、従来は調査研究の対象とされることが少なかった中小規模の石窟(群)中から、研究目的に適い今後に発展しうる可能性があるとして判断した遺跡を選定し踏査しました。

具体的にはジュンナル石窟、カラード石窟、パンハーレ・カージ石窟などを踏査しました。調査では、主要石窟の略測図の作成や画像記録の撮影など、次年度以降の調査研究にかかる基礎資料の作成を推進しました。これらの石窟の中には、先行時期の開鑿例では塔院(礼拝堂)と僧院を別個に造営するのに対して、両者を同一窟内に造営するという特徴を示すようになる事例が観察されます。この型式は後5世紀以降の後期石窟で主流となることから、従来設定されていた石窟造営中断期の見直しと先駆的形態の出現確認という観点から、重要な成果と判断できます。

また、時期的に併行する類似形態の石窟例として、グジャラート州に所在するタラージャー石窟やサーナー石窟などを踏査し、基礎資料を作成しました。これらの石窟にはヒンドゥー教に属する石窟も含まれますが、様式展開の観点から、同時代の独立した建造物と相互に影響を及ぼしたという推測を具体的に確認できる事例として、重要であることが判明しました。

平成19年度は平成20年2月22日～3月18日の期間、インド共和国内において現地調査を実施しました。第2年度の調査は初年度に引き続き、従来は調査研究の対象とされることが少なかった中小規模の石窟(群)中から、研究目的に適い今後に発展しうる可能性があるとして判断した遺跡を選定し踏査しました。

具体的にはカラード石窟やパンハーレ・カージ石窟、クダー石窟などを踏査しました。調査では、GPS測定器を利用した主要石窟の正確な立地データの取得や画像記録の作成など、本調査研究にかかる基礎資料の作成を精力的に推進しました。これらの石窟の中には、先行時期の開鑿例では塔院(礼拝堂)と僧院を別個に造営するのに対して、両者を同一窟内に造営するという特徴を示すようになる事例が観察されます。この型式は後5世紀以降の

後期石窟で主流となることから、その先駆的形態の出現の確認と従来の定説である石窟造営中断期の再検討という観点において重要な成果と判断します。あわせて、上記と比較資料とするため、アジャンター石窟やエローラ石窟、ピタルコーラ石窟などの標式的な石窟群を調査しました。

平成20年度は平成20年10月30日～11月4日の期間、インド共和国内において現地調査を実施しました。最終年度の調査として、初年度、第2年度で実施した中小規模の石窟(群)の調査成果を前提に、比較対象資料として、後代の独立建造物の様相を調査しました。また、本研究における主要な調査目的である後3世紀以降に造営されたジュンナル石窟やカラード石窟、パンハーレ・カージ石窟、クダー石窟などの調査で入手した主要石窟の正確な立地データや画像記録など、基礎データの整理を継続して行いました。

また、このデータと比較検討するため、先行時期の塔院(礼拝堂)と僧院を別個に造営する形態から、両者を同一窟内に造営するという特徴を示す折衷的な造営事例、さらに後5世紀以降の後期石窟で主流となる両者が合体した塔院型式への変遷過程を確認するという観点から、アジャンター石窟やエローラ石窟、ピタルコーラ石窟、オーランガバード石窟など、標式的な大型石窟群の先行調査を含めた先行研究を含む調査成果を整理しました。

これらを通じて、従来の定説である前期・後期石窟間における造営中断期の存在を再検討できる、後期石窟に対する先駆的形態の出現の確認と石窟造営期間の連続性の推定という、重要な成果を実証しつつあります。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計33件)

1. 米田 文孝,「世界遺産登録の光と影」,『阡陵』,58号,2～3頁,2009年,査読無。
2. 中谷 伸生,「絵画としてやってきた中国の禅僧たち-永井重良による江戸時代の頂相をめぐって-」,『アジア文化交流研究』,第4号,31～43頁,2009年,査読無。
3. 長谷 洋一,「日光山と仏師民部-元禄から宝暦の修復事業を通して-」,『哲学』,第24巻,1～26頁,2009年,査読無。
4. 原田 正俊,「日本中世における禅僧の講義と室町文化」,『東アジア文化交流学研究』,第2号,31～45頁,2009年,査読有。
5. 米田 文孝・豊山 亜希ほか,「インド共和国西デカン地方における小規模仏教石窟群の踏査(1)」,『関西大学博物館紀要』,14巻,1～23頁,2008年,査読無。
6. 米田 文孝,「沖縄県立博物館・美術館の開館」,『阡陵』56号,2～4頁,2008年,査読無。
7. 中谷 伸生,「江戸と京をつなぐ江戸狩野-周信,古信,洞玉,為恭-」,『美術フォーラム21』,第18号,6～9頁,2008年,査読有。
8. 中谷 伸生,「文人画とは何か-岡田半江《山水図巻(大川納涼図)》をめぐって」,『美術フォーラム21』,第14号,44～49頁,2008年,査読有。
9. 原田 正俊,「室町仏教と芸能・談義」,『芸能史研究』,183号,40～59頁,2008年,査読有。
10. 原田 正俊,「日本中世の禅宗と葬送儀礼」,『韓国仏教学結集大会論集』,520～525頁,2008年,査読有。
11. 木庭 元晴・米田 文孝ほか,「放射性炭素年代測定のための液体シンチレーション計測の改善Ⅱ」,『なにわ・大阪文化遺産学叢書』,第9号,2008年,査読無。
12. 木庭 元晴・白澤 武蔵,「考古遺産泥質堆積部のX線像から検出された人的攪乱」,『なにわ・大阪文化遺産学叢書』,第9号,2008年,査読無。
13. 米田 文孝,「考古学資料からみた道明寺天満宮」,『道明寺天満宮宝物選』,64頁,2007年,査読無。
14. 中谷 伸生,「江戸から運ばれた唐獅子図-狩野常信工房による妙心寺退蔵院障壁画残欠-」,『美術フォーラム21』,14号,104～107頁,2007年,査読有。
15. 中谷 伸生,「菅原布寿史-東アジアの源泉から蘇る現代の意匠」,『美術フォーラム21』,16号,18～25頁,2007年,査読有。
16. 中谷 伸生,「大阪の絵画と東アジア」,『視覚都市大阪の美術』,1号,13～16頁,2007年,査読無。
17. 中谷 伸生,「1930年代の日本画と台湾の画家陳進-植民地支配のイデオロギーと美術-」,『南島史学』,70号,1～16頁,2007年,査読有。
18. 中谷 伸生,「日本の近代画と台湾の膠彩画」,『東亜文化交流与經典詮釈』,1号,31～48頁,2007年,査読有。
19. 中谷 伸生,「東富岡鐵齋筆《巖栖谷飲図》考」,『アジア文化交流研究』,3号,1～20頁,2007年,査読無。
20. 中谷 伸生,「菅楯彦・奥谷秋石・阪正臣・山本行範による合作-きつねよめいりの巻-」,『伏見稲荷大社・朱』,50号,61～73頁,2007年,査読無。
21. 中谷 伸生,「大阪の文人画家・矢野橋村-『青飛白走帖』に見られる東アジアの文人趣味-」,『関西大学博物館紀要』,13号,159～182頁,2007年,査読無。
22. 中谷 伸生,「大坂画壇と長崎,そして中国-大坂画壇の再評価から東アジア美術史への構想へ-」,『アジア文化交流研究』,53～

72 頁, 2007 年, 査読無。

23. 長谷 洋一, 「東大寺の近世仏教彫刻-大仏開眼以降-」, 『ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集』, 4 号, 36~44 頁, 2007 年, 査読有。
24. 長谷 洋一, 「近世の仏教美術-日本彫刻史のなかの円空-」, 『日本史の研究』, 216 号, 37~49 頁, 2007 年, 査読無
25. 原田 正俊, 「中世仏教再編期としての 14 世紀」, 『日本史研究』, 540 号 2007 年, 40~65 頁, 査読有。
26. 木庭 元晴・白澤 武蔵・千葉 太朗ほか, 「大阪府に見られる 2, 3 の無層理層の堆積環境-X線撮像とレーザー回析粒度分析から-」, 『関西大学博物館紀要』, 13 号, 9~25 頁, 2007 年, 査読無。
27. 中谷 伸生, 「東アジアの本草学と博物学の美術史的一考察(上)」, 『関西大学東西学術研究所紀要』, 39 輯, 1~47 頁, 2006 年, 査読無。
28. 中谷 伸生, 「岡倉天心が評価したもの・しなかったもの-江戸狩野と大坂の文人画」, 『美術フォーラム 21』, 第 13 号, 61~68 頁, 2006 年, 査読有。
29. 長谷 洋一, 「東大寺戒壇院の鑑真和上像-近世模刻像の一作例」, 『阡陵』, 52 号, 6~7 頁, 2006 年, 査読無。
30. 長谷 洋一, 「渡唐天神図について」, 『NOCHS(Occasional Paper)』, NO. 2, 7~13 頁, 2006 年, 査読無。
31. 原田 正俊, 「九条道家の東福寺と園爾」, 『季刊日本思想史』, 68 号, 78~97 頁, 2006 年, 査読無。
32. 原田 正俊, 「臨濟宗五山派と加賀・能登」, 『加能史料研究』, 18 号, 11~15 頁, 2006 年, 査読無。
33. 原田 正俊, 「南北朝・室町時代の大乗寺・總持寺」, 『駒澤大学仏教学部論集』, 37 巻, 43~60 頁, 2006 年, 査読無。

[学会発表] (計 19 件)

1. 米田 文孝・豊山 亜希「西インド仏教石窟寺院の分布と造営時期に関する研究」, 日本考古学協会 2008 年度総会, 2008 年 5 月 25 日, 東海大学。
2. 一瀬 和夫・菱田 哲郎・米田 文孝・西田 敏秀, 「牧野車塚古墳の再検討-墳丘測量調査の成果から-」, 日本考古学協会 2008 年度総会, 2008 年 5 月 25 日, 東海大学。
3. 中谷 伸生, 「大坂画与明清画-論東亜美術史構想-」, 第5回日本漢学国際学術検討会, 2008年3月29日, 台湾・国立台湾大学。
4. 中谷 伸生, 「日本の文人画と東アジア-“文人画”か“南画”か-」, 国際シンポジウム・アジアの文人世界, 2008年1月19日, 関西大学・アジア文化交流研究センター。

5. 長谷 洋一, 「佛造僧と室町時代彫刻-奈良・般若寺十一面観音像を手がかりに-」, 美学会, 2008 年 6 月 7 日, 京都大学。
6. 原田 正俊, 「日本中世の禅宗と葬送儀礼」, 韓国仏教学結集国際学会, 2008 年 5 月 18 日, 東国大学(ソウル特別市)。
7. 中谷 伸生, 「近代的日本画与台湾的膠彩画」, 東亜文化交流与經典詮釈国際学術研討会, 2007年10月26日, 台湾・国立台湾大学。
8. 中谷 伸生, 「狩野永岳与中国文化第二回伝統中国研究国際学術研討会」, 2007年10月26日, 台湾・国立台湾大学。
9. Nobuo Nakatani, Fumitaka Yoneda, Aki Toyoyama, et al. “Through Ports, Passes, and Junctions: Reconsideration of the Excavational Patterns of Minor Buddhist Caves in Western India”, The 19th International Conference on European Association of South Asian Archaeology, 2007年7月3日, University of Bologna, Ravenna Section, Italy.
10. 中谷 伸生, 「1930年代の日本画と台湾画家陳進」, 静宜大学「日本学与台湾学」国際学術研討会, 2007年5月19日, 台湾・静宜大学。
11. 長谷 洋一, 「弧魂の救済-新出の孟蘭盆経曼荼羅図を中心に-」, 関西大学哲学会, 2007年12月17日, 関西大学。
12. 佐藤 ふみ・木庭 元晴ほか, 「奄美大島ビーチロック中の膠結物質から得た14C年代と安定炭素同位体比」, 2007年関西大学史学地理学大会, 2007年12月1日, 関西大学。
13. 前野 真慶・木庭 元晴ほか, 「池島・池内・下三橋遺跡にみられる黒色土の14C年代」, 2007年関西大学史学地理学大会, 2007年12月1日, 関西大学。
14. 影山 陽子・木庭 元晴・米田 文孝ほか, 「14C年代測定過程での同位体分別の評価-近畿地方の数遺跡から産出した有機物および炭酸塩試料について-」, 2007年関西大学史学地理学大会, 2007年12月1日, 関西大学。
11. 白澤 武蔵・木庭 元晴ほか, 「奈良県下三橋遺跡条坊側溝堆積物薄化試料のX線像から得られた堆積構造」, 2007年関西大学史学地理学大会, 2007年12月1日, 関西大学。
15. 木庭 元晴・米田 文孝ほか, 「考古遺跡産出試料の14C年代値($\delta^{13}C$ 補正済)と考古編年の検討」, 2007年度地理科学学会秋季学術大会, 2007年10月6日, 熊本大学。
16. 佐藤 ふみ・木庭 元晴ほか, 「北摂山地, 河谷埋積礫層からの始良Tnテフラの発見」, 2007年度地理科学学会春季学術大会, 2007年6月9日, 広島大学。
17. 白澤 武蔵・木庭 元晴ほか, 「考古遺跡(大

阪府)に広く見られる無層理堆積物の堆積構造と人的擾乱の認識」, 2007年6月9日, 広島大学。

18. 白澤 武蔵・木庭 元晴ほか, 「考古遺跡(大阪府)に広く見られる無層理堆積物の堆積構造と人的擾乱の認識」, 2007年6月9日, 広島大学。

[図書] (計 11 件)

1. 中谷 伸生(共著), 『亜洲語言文化交流研究』, 167~176 頁, 上海辞書出版社, 2009年。
2. 中谷 伸生(共著), 『東アジアの文人世界と野呂介石』, 3~12 頁, 関西大学出版, 2009年。
3. 中谷 伸生(共著), 『都市の風土学』, ミネルヴァ書房, 281~301 頁, 2009年。
4. 中谷 伸生(共著), 『東亜文化交流と経典全釈』, 台大出版中心, 241~256 頁, 2008年。
5. 原田 正俊(共著), 『太平記を読む』, 吉川弘文館, 112~130 頁, 2009年。
6. 原田 正俊, 『中世寺院-暴力と景観-』(共著), 247~270 頁, 高志書院, 2007年。
7. 原田 正俊・上田 純一ほか(編著), 『西笑和尚文案』, 思文閣出版, 380 頁, 2007年。
8. 木庭 元晴(編著), 『宇宙・地球・地震と火山』(増補版), 古今書院, 184 頁, 2007年。
9. 木庭 元晴(編著), 『宇宙・地球・地震と火山』, 古今書院, 180 頁, 2006年。
10. 長谷 洋一(編著), 『新修泉佐野市史第 11 卷(建築・美術編)』, 泉佐野市史編さん委員会, 146 頁, 2006年。
11. 中谷 伸生, 『大坂画壇の絵画-文人画・戯画から長崎派・写生画へ-』, 関西大学図書館, 75 頁, 2006年。

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

米田 文孝 (YONEDA FUMITAKA)
関西大学・文学部・教授
研究者番号 : 00298837

(2) 研究分担者

中谷 伸生 (NAKATANI NOBUO)
関西大学・文学部・教授
研究者番号 : 90247891

長谷 洋一 (HASE YOUICHI)
関西大学・文学部・教授

研究者番号 : 60388410

木庭 元晴 (Koba Motoharu)

[平成 18・19 年度]

関西大学・文学部・教授
研究者番号 : 40141949

原田 正俊 (Harada Masatoshi)

関西大学・文学部・教授
研究者番号 : 40278883

(3) 連携研究者

木庭 元晴 (Koba Motoharu) [平成 20 年度]

関西大学・文学部・教授
研究者番号 : 40141949